卒研ゼミ「深層学習」

- 6.2 Gradient-Based Learning
 - 6.2.1 Cost Function
 - 6.2.1.1 Learning Conditional Distribution with Maximum Likelihood
 - **6.2.1.2 Learning Conditional Statistics**
 - 6.2.2 Output Units
 - 6.2.2.1 Linear Units for Gaussian Output Distributions
 - 6.2.2.2 Sigmoid Units for Bernoulli Output Distributions
 - 6.2.2.3 Softmax Units for Multinoulli Output Distributions
 - 6.2.2.4 Other Output Types

2019年12月9日? 岡崎健人

現代におけるNNのほとんどは最尤推定を用いている

$$J(\boldsymbol{\theta}) = -\mathbb{E}_{\mathbf{x}, \mathbf{y} \sim \hat{p}_{\text{data}}} \left[\log p_{\text{model}}(\mathbf{y} \,|\, \mathbf{x}) \right]$$

- ・最尤推定では、コスト関数は「負の対数尤度」になる
- 訓練データとモデル分布の交差エントロピーと考えることもできる

※復習:最尤推定(§5.5)

$$\boldsymbol{\theta}_{\mathrm{ML}} = \underset{\boldsymbol{\theta}}{\mathrm{arg \, max}} \ p_{\mathrm{model}}(\mathbb{X}; \boldsymbol{\theta}) = \underset{\boldsymbol{\theta}}{\mathrm{arg \, max}} \ \mathbb{E}_{\mathbf{x} \sim \hat{p}_{\mathrm{data}}} \left[\log p_{\mathrm{model}}(\boldsymbol{x}; \boldsymbol{\theta}) \right]$$

 $p_{\text{data}}(\mathbf{x})$:真であるが $\boldsymbol{\theta}$ がわからないため未知の分布

 $p_{\text{model}}(x; \theta)$:値がxであるデータを得る確率(θ が変数の関数)

 $\mathbb{X} = \{x^{(1)}, ..., x^{(m)}\}$: i. i. d. に従うデータ

 $\mathbb{E}_{\mathbf{x} \sim \hat{p}_{\mathrm{data}}}[\,\cdot\,]$:確率変数 \mathbf{x} が経験的な分布 \hat{p}_{data} に従うときの期待値

※復習:交差エントロピー(§3.13)

$$\begin{split} H\left(\hat{p}_{\text{data}}, p_{\text{model}}\right) &= H\left(\hat{p}_{\text{data}}\right) + D_{\text{KL}}\left(\hat{p}_{\text{data}} || p_{\text{model}}\right) \\ &= -\mathbb{E}_{\mathbf{x} \sim \hat{p}_{\text{data}}}\left[\log p_{\text{model}}(\mathbf{x})\right] \end{split}$$

注意! ここでは訓練データをまとめて1つの文字 x で表しているが、 教科書の該当範囲では x と y が訓練データ

計算例:
$$J(\boldsymbol{\theta}) = \frac{1}{2} \mathbb{E}_{\mathbf{x}, \mathbf{y} \sim \hat{p}_{\text{data}}} ||\mathbf{y} - f(\mathbf{x}; \boldsymbol{\theta})||^2 + \text{const.}$$

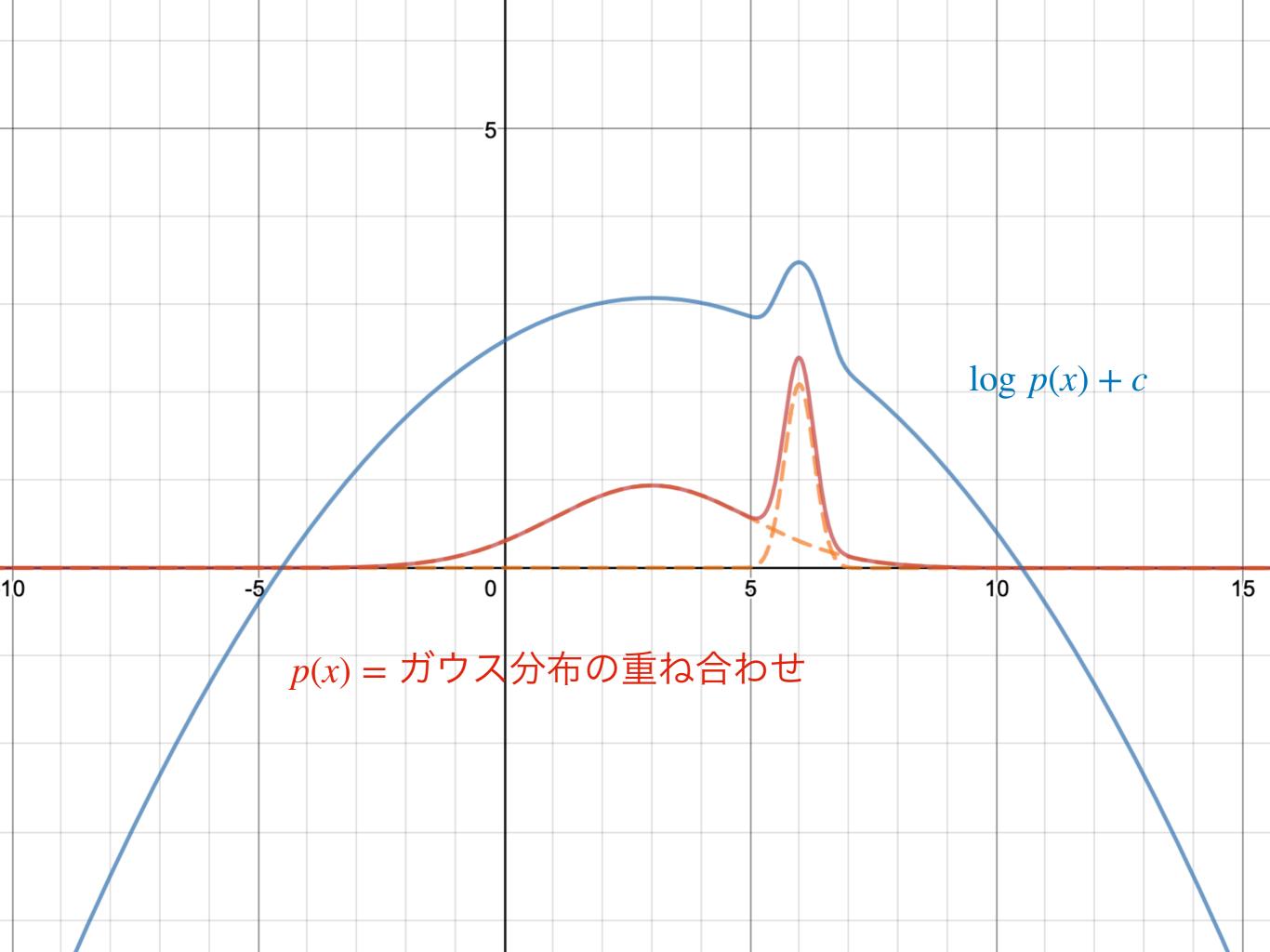
- ・ 尤度関数が $\mathcal{N}(y; f(x; \theta), I)$ に従う場合
- ・線形モデルのとき、最尤推定と最小二乗法は等価(§5.5.1)

コスト関数を自動的に作り出せるのが、最尤推定の強み

コスト関数の勾配 $|\nabla J(\theta)|$ は大きく予測可能であってほしい

- ・ 勾配降下法では $∇J(\theta)$ を用いて最小点を求めるため
- 飽和する(saturate, become very flat)ような関数は使えない
- 活性化関数が飽和するとよくない
- 尤度関数が e^x を含んでいても、負の対数尤度は「飽和」しない

					10						
					1 0-						
							e^{x}				
							e				
					_						
					—-5-						
飽	和し [·]	てい	る る								
Sa	atur	てい。 ate	9								
1											
		-5	5		0			į	- 5 		



- ・実際によく用いられるモデル(?)に対して、 $J(\theta) = -\mathbb{E}_{\mathbf{x},\mathbf{y}\sim\hat{p}_{\mathrm{data}}}\left[\log p_{\mathrm{model}}(\mathbf{y}\,|\,\mathbf{x})\right]$ は、通常、最小値をもたない
- 連続型確率変数の出力分布の密度を極めて高くできる
- →交差エントロピーは-∞に近づく
- ・無限大の報酬を回避するように、正則化を行う(§7)

分布 $p(y \mid x; \theta)$ よりも「xが与えられた元でのyの推定量」を知りたいとき

- yの平均を与える関数 $f(x; \theta)$ は知っているものとする
- 十分強力なNNを用いれば、どんな関数fも表現できる
- ・ この考えは汎関数(functional, 関数から実数値へのマッピング)になる
- ・コスト関数が「ある関数形」をとれば、交差エントロピーが最小値を持つようになる(かも)
- ・ 変分法(calculus of variations)が必要だが次のことを知っとけばOK

知っとくこと①/2

$$f^* = \underset{f}{\operatorname{arg \, min}} \mathbb{E}_{\mathbf{x}, \mathbf{y} \sim p_{\text{data}}} \|\mathbf{y} - f(\mathbf{x})\|^2$$

$$\to f^*(\mathbf{x}) = \mathbb{E}_{\mathbf{y} \sim p_{\text{data}}(\mathbf{y}|\mathbf{x})} [\mathbf{y}]$$

無限に多くのデータを真の分布から得るならば、コスト関数は平均二乗誤差になり、xの値が与えられれば対するy平均を知ることができる

知っとくこと②/2

$$f^* = \underset{f}{\operatorname{arg\,min}} \mathbb{E}_{\mathbf{x}, \mathbf{y} \sim p_{\text{data}}} ||\mathbf{y} - f(\mathbf{x})||_1$$

$$\rightarrow f^*(x) = (x)$$
 に対する y の中央値)

- x の値が与えられたときの y の中央値(median)が得られる
- このコスト関数は**平均絶対誤差**(mean absolute error)とよばれる

それでも*p*(*y* | *x*)を求めたほうがいい

- これらのコスト関数を勾配法で使うと、出力ユニットが飽 和してうまくいかないことがある
- ・ そのため条件付き分布 $p(y \mid x)$ を求める必要がなくても、交 差エントロピーの方法を使うほうがポピュラー